

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
April 2026

No.51

【特集】JOINT：つなぐ／つながる
人がつながる

今号の特集テーマは「人がつながる」。プログラムの枠組みを超えて共鳴し合う助成対象者たち。彼らの交流から新たな試みが芽吹く、そんな希望に満ちた春の新年度号をお届けします。



2 026年度を迎えるにあたり、今年度、トヨタ財団がどのように助成活動に取り組みかについて、あらましをご説明させていただきます。

まず、助成金総額は4億8千5百万円、昨年度よりも11・5パーセント増額しました。この増強された助成金予算を活用して、社会的に意義の大きな各種プロジェクトをさらに強力に支援していきたいと考えています。

現在のトヨタ財団の助成の枠組みは、具体的な課題の解決を狙うために焦点を絞り込んだ先端技術、外国人材、人口減少の3つの特定課題と、広い視野に立つて人々のより一層の幸せを目指すための国内、研究、国際の3つの助成プログラムから成り立っています。これらすべての助成を貫くキーワードは、「つながり」です。

助成事業においてこの単語を意識する理由は、現在の国内外で人々が向き合う課題の多くが、人と人、人と自然、人とモノ、それに国と国の間の変化と関係していると考えからです。

か つての日本では、家族・親族、自治会、村落、会社、組合、学校同窓会、信徒団体など、相互に見知ったさまざまな「固い」集団や組織の下に人々がまとまってきました。人は集団や組織の一部として存在していたと言ってもよいでしょう。しかし、現在では、「個人」の価値が増し、既存の集団や組織を介した人と人とのつながりは必ずしもうまく機能していません。経済活動の進展とも相まって、多数の人が都会でバラバラに、ま

を最大限に活用して、次世代のプログラムのテーマの萌芽になるようなパイロット・プロジェクトを発掘し、積極的に助成するつもりです。

また、トヨタ財団の社会への貢献をより多くの方々に知っていただくために、これまでも増して積極的に広報活動に取り組みます。具体的には、秋に「トヨタファウンデーションズデイ」(仮称)を開催します。助成対象者が一堂に会し、活動や研究内容、成果を発表して相互交流を進めることがその主たる目的ですが、これと並行して、一般の方々にも財団の活動をより

2026年度によせて



公益財団法人 トヨタ財団理事長
羽田 正

た少数の人が地方で散在して生きるようになりました。

その一方で、IT技術の飛躍的な発展により、離れたところにいる人同士が互いを知らないままネット上で緩やかにつながることが増えました。これまで、社会の基本的な仕組みや習慣は、対面型の固い組織や集団の存在を前提として組み立てられ、整えられてきましたが、それらが各所で機能不全に陥っています。トヨタ財団の設立された50年あまり前と比べると、人と人とのつながり方には、明らかな変化が生じています。

もちろん、このような大きな変化が日本でだけ起こっているわけではありません。程度の差こそあれ、諸外国においても似たような変化を見て取れます。紙幅の関係でここでは触れませんが、人とモノ、人と自然のつながりも50年前とは大きく変わりました。さらに、昨今の大国の振る舞いを見るにつけ、主権国家の存在を前提とした国と国のつながり方が様変わりしていることは明白です。

このように、つながりに注目することで見えてくる国内外の大きな枠組みの変化を念頭に置きながら、身近で具体的な場面で人々のより一層の幸せを目指す各種プロジェクトへの助成を行うことが、現在のトヨタ財団が目指しているところです。

今 年度は、各助成プログラムの骨格とそれぞれが掲げるテーマは変えませんが、その一方で、次の世代の助成プログラム開発に向けての調査・研究も積極的に行ないます。昨年度に比べて倍額の予算を配分したイニシアティブ・プログラム

深く知っていただけるような魅力的な企画を実施できればと思います。

私自身も、本財団の助成の基本コンセプトである「つながり」をテーマとして、著名人・有識者や助成対象者と語り合い、それを動画として発信するつもりです。これらの新しい試みを通じて、できるだけ多くの方々に本財団の取り組みを知っていただき、応援していただければと思います。

それでは今年度も、皆様方の温かなご指導とご鞭撻をお願いいたします。



Photo by Yoko Niide

沖縄とはいえまだ肌寒い3月上旬、国内助成の同窓会企画を実施しました。写真は2日目に訪れた嘉陽の浜。沖縄らしいエメラルドグリーンの海が美しかったです。(P.33参照)

CONTENTS

FIRST WORD ● 羽田 正
2026年度によせて 2

【特集】JOINT: つなぐ/つながる
人がつながる

助成対象者鼎談 渡辺知花 × 西山佳孝 × 佐藤絵理

出会いが紡ぐ新たな未来 4

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

国際助成プログラム ● 田中雅子
「多文化共生」の先へ 14

国内助成プログラム ● 栗林知絵子
「出会い」から生まれる豊島区の未来 16

助成から10年の今と未来 ● 山下賢太
半径400メートルで完結するコミュニティづくり 18

特定課題
2025年度プロジェクト一覧 20

2026年度 事業計画 22

「私」のまなざし ⑤ 赤坂文弥
共創のためのインフラ構築をめざして 26

活動地へおじゃまします! (愛知県蒲郡市を訪ねて) ● 林知香
子どもたちがひらく未来の蒲郡 28

BOOK REVIEW ● 式部絢子
移動する子どもたちの〈ことば〉が揺さぶる、私たちの言語観 31

トヨタ財団ジャーナル 32
成果報告会 & 中間研修・報告会を開催 ほか

トヨタ財団が助成活動をするうえで意識していることの一つに、助成を受けた人同士がつながるようなきっかけや場を提供することがあります。助成を受けているプロジェクトに関するだけでなく、その後も広がっていくようなつながりが生まれることを期待して、意識的に報告会や交流会などの場を設けています。

今回お三方にお声がけしたのは、先日、たまたま西山さんと佐藤さんとお話する機会があったときに、そういう私たちの意図を超えた自主的なつながりから新しい展開が生まれているという話をお聞きしたからです。

本号の特集は「人がつながる」。そして今年度の通年テーマは、本誌タイトルとも重なる「JOINT：つなぐ/つながる」です。プログラムの枠組みや年度の垣根を超えて共鳴しあうお三方に、そのつながりの実情と可能性をうかがいました。



鼎談場所：準喫茶カガモク

ファシリテーター◎加賀 道(かが・みち)
トヨタ財団リサーチフェロー。地域活動の拠点として「準喫茶カガモク」を宮城県鳴子温泉川渡地区にて夫婦で経営



西山さんのブックキャラバンに飛び入り参加した際にカガモクを訪問

◎佐藤絵理(さとう・えり)

2021年度 研究助成プログラム「地域を超えたピアサポートを実現するひとり親支援プログラムの開発——『主体性』の回復から『新しい連帯』が実現する過程の検証」代表者



助成対象者鼎談

出会いが紡ぐ 新たな未来

Watanabe Chika Nishiyama Yoshitaka Sato Eri
渡辺知花 × 西山佳孝 × 佐藤絵理
ファシリテーター◎加賀 道

マンチェスター留学に際してお世話に！

ブックキャラバンに飛び入り参加。西山さんたちのイベントではナイチンゲールについて語った(2026年2月)

今回の鼎談をきっかけに、西山さんたちのイベントに渡辺さんが登壇(2026年2月)

◎西山佳孝(にしやま・よしたか)

2015年度 国内助成プログラム「KOSHIKI DESIGN CAMPを通じた島の未来を照らす仕事創りプロジェクト」メンバー(代表者：山下賢太)



トヨタ財団50周年記念事業特別インタビューでチリを訪問して取材

カガモクでブックキャラバンを開催



◎渡辺知花(わたなべ・ちか)

2018年度 研究助成プログラム「防災価値の翻訳：日本とチリとの防災に関する国際協力における『遊び』の役割」代表者。今回はオンラインで参加

三人の関係性と活動状況

加賀 お三方にご自身の活動内容をご紹介していただきたいと思いますが、まず、なぜ今日私のカフェカガモクでやっているかを説明しますね。2021年12月、当時西山さんが助成を受けて『公民館のしあきつて』という本を出版されたのですが、その本についての全国キャラバンのキックオフをここで開催したんです。月に一回、いろんな人とカレーを食べながら地域のことなどを語る場をこのカフェで開いていたので、その企画の一つとして、本のお話や公民館のお話をさせていただきました。財団のスタッフも参加することになっていたので、せっかくの東北出張なので、東北大学の佐藤さんにもお話をうかがうべく仙台でお会いして、今日これから鳴子でイベントがあるってそれに行くんですよと話したところ、佐藤さんが、そんな面白い会があるんですか？行きます！って飛び入り参加してくださったんです。なので、カガモクが佐藤さんと西山さんの出会う場となりました。

佐藤 そうですね。もともと保健師という仕事をしていたの

で健診などで公民館に出入りする機会が多くて公民館が身近だったこともありましてし、コミュニティを考えた時に、日本においては公民館って欠かせなかったはずだぞ、これは行った方がいいかもしれない!!と直感で思いました。泊まる用意なんてしていなかったの、仙台駅で財団のスタッフの方と衣料品を買いまわったり、加賀さんに宿を取っていたりして、急遽ここに来ました。

加賀 私としては、この本の出版キャラバンで会ってつながりは終わりだと思っていたんですけど、なんとその後、お二人はさらに展開していったわけですね。

佐藤 私たちがもう一度つながり直したのは、2022年10月でした。私が当時所属していた東北大学の公衆衛生看護学分野というところでは年に4回研究会をやっています。専門はもちろん看護学なのですが、看護じゃない分野の方からお話をいただく機会を年に3回設けていて、2022年はその研究会の係がたまたま私だったんです。それで看護の話に近いような、でも他分野の人をリストアップして、学部生はじめ院生などにも、お話を聞いてみたい方についてアンケートを取りました。1番希望者が多かった方に連絡したら日程が合わないということだったの、2番目に希望が多かった西山さんにぜひと話をさせてくださいなんです。実はその1番目の方というのは、(渡辺)知花先生だったんです。

渡辺 え!?私?2022年ですか?覚えてない!

だろうかっていうことを思っていたら、西山さんからある日突然連絡がきて、西山さんともその部分で再びつながり始めているといった現状です。今日はよろしく願います。

西山 よろしく願います。さっき加賀さんにご紹介いただいた『公民館のしあさって』という書籍は、トヨタ財団の非公募の助成事業で展開させていただいたプロジェクトです。経緯としては、ちょうど10年前に鹿児島別のプロジェクトで最初に国内助成で採択いただいたのをきっかけに、そこで同じ年度に助成を受けていた助成先の一人とながつて「公民館のしあさって」というプロジェクトができました。

この書籍の出版に深く関わったんですけれど、私は社会教育とか公民館に造詣が深いわけではありません。外野に生息している人間が、エジプト・アラブ共和国で公民館を作らせていただくという、ちょっとぶつ飛んだ話でした。エジプトに公民館を作りに行ったのをきっかけに日本の公民館について知れば知るほど、私には日本における社会教育がいまいち盛り上がっているように見えなかったの、じゃあそれを盛り上げていこうということ、何人かのメンバーと一緒にプロジェクトをやっています。

最後に余談ですが、今日の鼎談について加賀さんから最初にメッセージをもらった際、私はちょうどロンドンに着いた数時間後だったんです。そのメッセージにはマンチェスター在住の渡辺さんも含めた鼎談をいかがですか?って書いてあって。メッセージを受

佐藤 全然いいんです(笑)。でも断っていただいたおかげでと言っているのか、西山さんと再びつながることができました。コロナが流行っていた時期で集まるのもなかなか大変だったんですけど、わざわざいらしてくださいって、ナイチンゲールについて社会教育の視点からお話ししていただきました。

そういうえば知花先生、私、博士論文を間もなく提出できそう、PhDキャンディデイトになりました!

渡辺 おめでとうございます!

佐藤 ありがとうございます。2021年末にここに来た時はまだ修士課程だったんです。研究しているものがよくわからなくて、いろいろとドロドロしたものを抱えながら模索していた時期だったので、川渡に行くということや、キャラバンで公民館のお話を聞くのもなにか研究の突破口やヒントがあるかもしれないと思って、半ばわらをもつかむ気持ちで来ていました。

活動状況としては、当時はシングルマザーのオンラインでのピアグループを研究していて、なぜ対面ではなくオンラインの場に集まるのかという問いを発展させてきました。語りづらさを抱えた人にとって対面でのコミュニケーションは、ときに予期しない方向に進んでしまったりと何かとやりづらい。それゆえ、オンラインという司会や時間、ミーティング次第といったある程度構造化できる場ということが、彼女たちの安心につながっている

け取ったときはロンドンにいたのですが、その前にマンチェスターに行っていたのでこれも少なからぬつながりかなと思っています。

渡辺 偶然のつながりで面白いですね。改めてマンチェスター大学で文化人類学をやっている渡辺です。私は2019年度、日本とチリの防災と遊びを使ったつながりに興味を持って応募したプロジェクトに助成をいただきました。最初は、日本とチリの防災に関する国際協力だけのテーマで始めたんですが、その中でプラス・アーツの永田さんに出会って、すごく面白いと思ったので、防災と遊びについてどうやってつながっているのかを見てみようと思つて始めました。

2016年にJICAの防災関係の研修に行った時に、チリのタルカワノ市からボリスさんという方がいらしていました。タルカワノは2010年の地震津波で甚大な被害を受けたところで、1960年にも大きな地震があった場所です。チりに初めてできた防災課というパートメントでチーフをやっている方で、たまたま日本とチリの研究を始めたいと思つていたので、なかば強引にランチの時に一緒に座って、遊びに行つてもいいですか?って聞いたらいいですよって言ってくれたので、2017年に初めてタルカワノに行きました。ボリスもJICAの研修を通して永田さんの研修を経験されて、カエルキャラバンにすぐく衝撃を受けてタルカワノでもボリス流のカエルキャラバンのことをやってきました。防災と遊びについてつながりはチリでも起こっているのを見たので、日



ることがわかってきました。博士課程に進学して、よりその課題を磨いていく中で、一つそれまで見逃していたことがあって、それはその活動の中で行われていた、自己の経験を「書く」ということ。そして、それを仲間と読み合うということについて今は深めています。当事者たちが書くっていう文化的な作業とそれを発信することが、わたしたちの世界の知の構造や風景をどういうふうに変えていくのかな、みたいなところに興味をもって取り組んでいます。

もう一つ、看護の分野にいたということもあって、もうオタク、趣味的な感じでナイチンゲールという人が気になっています。昔からそんなに好きっていうわけじゃないんだけど放っておけない人みたいな感じがあったんです。それで大学院でプラグマティズムの考え方に会ってから、なんとなく気になるあの人——ナイチンゲールっていう人——をプラグマティズム的に読むことができない

本とチリの比較というよりは、日本の防災と遊びを使った手法はどうやってチリで実施されているのかに興味を持ちました。

しかし、コロナ禍で2020年、21年とチリに行けず、代わりにボリスと、トヨタ財団のプロジェクトで共同研究者になっていたコンセプション大学のジェニーさんに、私が予定していた活動をやってくれないかと頼みました。

タルカワノでのカエルキャラバンでゲームは作ろうと思つていたんですけど、最終的には小学校で教えるカリキュラムも作ろうという話になって、ドキュメンタリーを作つて、コミックを作つて、インタビューした方々の話をイラストにした本を作りました。予定より長引いてしまつて終わったのが2023年でしたので、トヨタ財団さんには本当にお世話になりました。



人と人のつながりを担う場所

渡辺 佐藤さんが講義の依頼ではなくイギリス留学の件でご連絡をくださったのは2023年でしたか?

佐藤 夏頃ですかね。

渡辺 私は前の研究が国際協力支援で、人を助けるテーマにはすごく興味持っていたので、いいですよと返事をして。それで翌年マンチェスターにきてくださったんですよね。

佐藤 2022年に看護の研究会の依頼をさせていたどきに、知花先生がこのような研究をされているというのは存じていて、

その後一方的に片思いをしておりました。同じ研究室の岡田彩先生(2018年度研究助成代表者)が知花先生と同じ年にトヨタ財団の研究助成を受けていらしたので、中間報告会などで他にこんな研究をされている方がいらしたよ、といういろいろなお話を聞いていたのも影響があったかもしれない。

留学に関して資金的なサポートを得るためには所属研究室とはまた異なった視点で研究についてアドバイスをくださる、受け入れ研究室を探さなければなりませんでした。それでどうしようってなつたときに、岡田先生がこの研究はトヨタ財団でのご縁だし、トヨタ財団に関係があるのかなかにお願ひしてみたら? って提案してくださったんです。それで知花先生に突然で申し訳ないのですが...とご連絡をさせていただきました。

渡辺 突然でしたが、トヨタ財団のつながりがあったから信頼できたというところもあります。

佐藤 同窓生みたいな感じで、きつとわかってくれるんじゃないだろうかと思つて。思い切つて投げてみました。そうしたらボールを受けてくださいました。

西山 トヨタ財団もここ数年アルムナイプロジェクトみたいなことをされていますよ。

加賀 そうですね、国内助成プログラムは特に。

佐藤 あ、そうなんですか。

西山 あえて佐藤さんが同窓

と協力しようとか、家族で防災しようということがメインです。もちろんそういうメッセージも、プラスアーツの子ども向けの防災教育もすごく大事だと思つてですけど、コミュニティがなくなっていくようなところで、どうやって近所と協力すればいいのか、自治会には若い人がいなくなつていて

全員七十代、八十代だつたらどうやって防災すればいいのか。そうしたなかで公民館や図書館、ソーシャルインフラストラクチャーというものが、すごく大事な役割を担つていく、いると思つてますよね。防災の段階でそのつながりがあるからこそ、災害が起きた時に協力しようということになるはずで、人口が減っていくなかで防災の観点から自治会、公民館、図書館のようなスペースがどういう役割を担つていけるのか、それで公民館について聞いてみたいと思つたんです。

西山 まったくもつておっしゃるとおりです。先ほど申し上げた、日本の社会教育や公民館が待望されてエジプトに作ったものの、振り返ってみれば、日本がいまいち私には盛り上がつていないように見えなかつたところが、今お話しされたところとつながつてくるんじゃないかと思つています。公民館とか社会教育とか地域社会とか、今の渡辺さんの言葉だと、それらをコミュニティで表現されてきましたけども、それってニアリーイコール地域社会のことだと思つてます。

生の話題を出したのかと思つた。

加賀 ご存じなかつたですか?

佐藤 はい。

西山 今度沖縄で開催する案内が送られていますよね。

加賀 はい。トヨタ財団には助成の枠組みが大きく三つあつて、西山さんは国内助成というプログラムがメインです。そちらではアルムナイ企画というのを定期的に開いて、同窓会的なことをやっています。研究助成ではそこまでできていないんですけど、中間報告会やワークショップを開いて交流の場を作っています。

西山 しかもこの企画、太つ腹だなと思うのは、旅費の負担もしてくれるんですよ。

佐藤 そうなんですか。

西山 いつもちっちゃく米印で「旅費はこちらで持ちます」って書いてあつて。

佐藤 じゃあ行かなければですよ。

西山 助成先のアーカイブとかストックつて、財団にとっては多分めちゃくちゃ大事なんだろうなと思うので、そこまでしてくれる



公民館が何をやる場所か、難しく表現すると「社会教育を実践するところ」なんですけど、その実践フィールドはどこかという地域社会なんです。なので、社会教育は公民館活動を通じて、地域社会でいろいろな実践を経験的に学んでいく。社会教育というのは世の中で起こるできごと全てが対象の範疇なので、防災や災害対応もそのパートの一つです。日本では防災直後から半年間くらいは災害に対して多くの視線が向くんですが、ある方の言い方では、「私たちは災害と災害の間の日常を生きているから、防災は日常にどれだけ防災という顔をしないで、エンターテイメント的にやっていけるのかっていうのが問われている」と。

さっきの永田さんのカエルキャラバンなんかそれが中心だと思いますが、アジアを中心に海外展開も多数やっていて、あまり「そのま」の展開にこだわらずに、柔軟にカエルが何か他の動物に変わったりしていますよね? そういうものが日常にインストールされていて、防災や災害対応の顔をしていない。日常

のかな、と。

でも、そういうつながりがあるからこそ、新しいプロジェクトがどんどん生まれているような感じがしますよね。

加賀 今回はこのお三名を取り上げていますが、年間通していくつか同じようにインタビューをやつていこうと思つています。そういう場を通じて、もしくは利用してもらつて、新しいつながりが生まれているようなので、企画している側としてはすごく嬉しいですね。



新しいつながり方、研究者の視点

渡辺 西山さんには公民館についてお話をお伺いしたいです。すごく面白いと思うので。

西山 あ、そうですね? 渡辺さんから見て、公民館に興味を持つていただけのようなポイントがありましたか?

渡辺 まだ全然動いてはいないのですが、新しいプロジェクトを始めたいと思つているんです。プラスアーツの活動を見てきて、あれは基本的に子どもがターゲットじゃないですか。でも、人口減少が進む日本と世界を考えると、なんで子ども相手だけなのかなつてずつと思つていて。日本で防災というと家族単位じゃないですか。パンフレットなどを見ていると、お父さんお母さんおばあちゃん、子どもが二人というような絵が描かれているんですけど、でもそういう家族ではない人たちは多いし、増えていますよね。

日本のコミュニティ防災は、近所の人たち

をより良く豊かに生きるための、いい意味でのエンターテイメント性を持った、プラスアーツのゲームのデザインは上手だなとも見ていて思います。

日常をつないでいくそのフィールドとして、公民館とか社会教育はめちゃくちゃ大事だなと思つてんですけど、これは私たちがどこまでやる必要があるのか、いつも疑問に思つてプロジェクトをやっています。今申し上げた公民館を盛り上げていく活動をしちゃったら、社会教育を盛り上げていかないといけないし、地域社会を盛り上げていかないといけないからです。結果的に私は、公民館活動が豊かになつていかないといけないということに気づいてしまった責任を取りまして、壮大すぎるんですけどやっています。渡辺さんのご関心の防災は重要なパートの一つだなと思つて見ていたので、私たちが一緒にできることがあれば面白いんじゃないかな。

渡辺 面白いと思います。加賀さんのカフェも人をつなぐという意味では公民館と同じような役割を果たしていると思つています。佐藤さんが研究されているピアグループも同じようなつながりを作っていますよね。近所単位とか家庭単位ではない、違うつながり方で、どういうふうな今の日本人つながつているのかっていうのを理解しないと防災もできないと思つています。

防災教育をやっている人たちと話していると、リタイアされた方が多く、20代、30代、40代の方たちは防災教育から外されている感じがします。仕事で忙しかつたり、地域の活

動などに興味がなかったり、若い人たちが自治会に入りたがらないとも聞きます。でも、どこかでみんなつながっているとと思うので、そういうつながりを理解して研究する。また、家庭のあり方が変わってきているところで、それに基づいた防災のあり方、防災教育の仕方というのが必要なんじゃないかなと思っるところです。

西山 それ、やりたいですね。今おっしゃった、いわゆる現役世代の人たちが自治会などに参画してこないとか、排除されているとかに對していろいろなアプローチがありますが、私はここ数年でよくわかったんですけど、それはひとえに社会教育の衰退が招いた結果だと思っいて。

渡辺 というところ？

西山 簡単に言うと、たとえば青年団などはこれまで「イエス」か「はい」で加入してきた団体なんですよ。

渡辺 なるほど。

西山 ある意味強制加入でした。20代そこそこになったら加入届を出して、もれなく受理される。現役世代が全員勢揃いしてびっちり縦でつながって、参画しない青年がいたら、それは上の世代から社会には参加しなきゃいけないんだって教えられる。かつてはポジティブな意味で社会教育のグリップが効いていた。なので、現役世代が関わらないなんて話はなかったんです。そこを現代にどれだけ持ち込むかは賛否あつて、私も「イエス」か「はい」の加入届を絶対やるべきとは思っいていません。いずれにしても、社会教育とか公民館

も、今のこの地域だったり、その人のあり方みたいなところを追求しているプロジェクトが多いと思うので、場所はどこであつても、みんなが抱えているジレンマや課題は同じだと思っいます。どこに行つても地域のつながりが弱つているとか、若い人たちが地域の活動に参加しないという事は言われています。でも災害は増えているし、家族のあり方もどこの国でもどんどん変わつている。なので、そういうところでつながるんじゃないですかね。普遍的なチャレンジみたいな。人類学者として普遍的とか言っちゃいけないのかもしれないですけどね。

助成を受けているんなことを研究したり、地域で活動している方々に会う機会があるじゃないですか。地域で活躍する人、あとは研究として、課題に對してもっと広い視点で見ている人とか、いろんな立場の人を見ていて、同じ課題でも取り組み方とかアプローチの仕方が違つている方がいっぱいいて、すごくいいなつて思っんです。地域で活躍している人は地域だけしか見えないこともあるけど、そういう人と研究者が繋がると、もっといいものが生まれるんじゃないかなと。今日いらつしやる皆さんは、どちらも結構見ている方々だなつていうのはすごく感じますね。どちらも見ているし、どちらも行き来しているみたいない感じ？



プロジェクトを超えたつながり

加賀 今回のテーマは「人がつながる」です

活動がそこをサボつてきた結果が今の日本社会の中に現れていて、それを今一度現代の中心のように捉えて展開していくのかつていうのが求められている。

2026年2月に大規模な展示会を企画しているのですが、そのパートの一つで災害や防災の日常性を社会教育と掛け算しながら紹介していく展示コーナーを作る予定です。渡辺さんの関心とめちやくちや重なるところだな一つて、お聞きしていて感じました。

渡辺 そうですね。

西山 今日のようなオンラインで、ちょうどこのぐらいの時間からトークイベントをやる予定なので、もしご都合が合えばぜひ登場してください。(※実現することになりました)

渡辺 ありがとうございます。すごく面白いと思っいます。もつと聞きたいです。

佐藤 私のピアグループ研究にも、すごく共通すると思っいます。ピアグループもみんなが集まつて、お互い大変だったことを語り合つているわけじゃなくて、そこで一緒に絵を描いたり、コラージュを作つたり。要は話し合うために来ているのではなくて、お茶を飲むとか編み物をしているなかで、そういうえげごういうことがあつたよね、と話し合っんです。

防災もきつと、防災です、避難訓練ですつてやると、一歩引かれてしまふと思っうし、ピアグループも、今日は困難を話す会ですみたいにしたら絶対誰も来ないと思っうので、その辺が同じなのかなつて。

渡辺 私は大学院に行く前に特定非営利活

けれど、皆さんはトヨタ財団の関係者とか関係なく、自分の研究とか興味関心など、いろんなところを超えてつながつていくつていうことを意識的にしているんですか？

西山 つながるつて話にかこつけますと、トヨタ財団には個々の助成先の団体や研究者をつなぐ橋渡し役として、プログラムオフィサーが絶妙なポジションにいらつしやるんじゃないかなと思っいますね。私が公民館プロジェクトをやるきっかけになつたのも、偶然もありつつ、プログラムオフィサーの方の絶妙な采配があつたからだと思っています。

加賀 渡辺さんがボリスさんとなつたのもすごいですよ。ランチのときに話しかけて、そこからスタートですもんね。

渡辺 そうですね。ボリスとのつながりは本当にありがたいと思っています。私が行けなかつたからボリスに関わつてもらつて、そのプロジェクトがボリス自身のものにもなつていきます。遠くにいたので全然コントロールできないんだけど、でもそのおかげでいろんなものが生まれています。研究者側も自分のアイデアをあまり大事にしすぎないで、ある程度自由に使つているんなことをやつてもらつていう、その体制も大事なのかもしれないです。

加賀 佐藤さんは、その辺は意識して関わつてらつしやいますか？

佐藤 私は、人に会つたら何かが変わると思っているところは結構ある気がします。だからイギリス留学に際して知花先生にお願いしに行つたときも、あえて、自分にとって敵

動法人ジェンという国際協力の緊急支援団体に働いていたんですけど、すごく覚えてるのが、地震津波後のスリランカでプロジェクトをやつたとき、トラウマについて直接話すのではなくて、一緒に編み物をしたり、漁業のものを一緒に修理したり、手で作業をしながら、さりげなく起こつたことについて話せる場を作つて、それを重視していたことです。

アメリカ式の直接トラウマについて語るのではなくて、間接的にさりげなく横から入るようなことを重視していたという活動が、もう何年も前の話なんですけど、すごく記憶に残つています。間接的に行うつてとても大事なんだなつて。佐藤さんがおつしやつたことと同じだと思っんです。

佐藤 そうですね。公衆衛生の視点から日常的な健康支援、病気になつた時だけじゃなくて誰かと関わりあつて、たとえばメンタルヘルスを日常的にケアしあつていくみたいなところでは、テーマは違うけど似たような感じがありますね。

西山 渡辺さんがやつているのも遊びがキーワードになつているし、取り組んでいる内容は全然違いますけど、近いんだなつていうのは感じました。

佐藤 不思議ですよ。助成対象者の方々話し合つていくと、プログラムを超えて「なんかわたしたち似てるよね」みたいな話になるのは、トヨタ財団の助成対象者の中の会話でよくあるなと思っているんですけど、どうですか？

渡辺 日本でも他の国でのプロジェクトで

しい状況のところに飛び込みたかつたという思いもありました。そもそも取り組んでいる研究が自分のシングルマザー経験から出発したので、どうしたらいいのかわからない、苦しい、そういうところに研究の意欲みたいなものがあつたんです。

大学院では環境や人間関係に恵まれて、とても充実した日々を過ごすことができました。でも、来年は博士論文を提出するときにになり、もしこの状況の中でこのまま書き続けていたら、自分がだんだんそのときの苦しかつたこととかそういうことに鈍感になつていつて、博士論文としてちよつとまざり方向に行きそうだが、これはなにか別なところと一度相互作用した方が良さそうだなと思つて異なる環境を求めました。

誰かと会つて、話して積極的な意味で自分を壊してもらう、みたいなところがありますかね。そういう意味で意識的であるのかもしれないし、でも一方で、その時その時の出会いを大切にしているので、そんなに計画はしてないのかもしれない。既存の凝り固まつた自分が壊されて何かいいものを思いつくかもしれないみたいなのところは意識的ですね。

加賀 イギリスのお話が少し出たので、佐藤さんが行かれた時に、どんなことをしていたのか、少しお話をお聞かせください。

佐藤 2024年の春にマンチェスター大学にお邪魔させていただきました。自分の興味関心はシングルマザーというところで、行政では手の届かない部分を非営利団体などの民間団体が担つている、すなわち寄付金や助

成金によって支援を受けているので、彼女たちはどうしても寄付場面で受益者になる経験が多いのですよね。でも、ファンドレイジング場面で受益者に焦点を当てた研究はそれほど多くない。それで受益者の研究の動向をもっと知りたいと思い、知花先生の講義を受講したり。

あとは、イギリスのチャリティ団体の方が寄付者と受益者の方々のコミュニケーションをどのよう調整しているのか、あるいはしていないのかをインタビューするにあたって、いろいろ知花先生に教えていただいたり、生活のサポートをしていただきました。

一番印象的だったのは、知花先生の講義に参加できたこと。私は文化人類学に関しては本当にわからなかったのですが、いろいろな側面からの文献や理論枠組みがあるんだなっていうところが、すごく目から鱗っていうか、自分の研究をさらに豊かにしてくれそうな文献に出会うきっかけみたいなところを教えてくださいましたのがすごくありがたかったです。

文献との出会いもつながりかなと思うんです。知花先生からは実際に「こういう文献があるよ」、「これがあなたの研究に生かせるかもしれない」といった、文献との出会いを促していただきました。そういった出会い、自分の分野からの景色では全く見えなかった文献と出会わせてくれたことは、今の研究を豊かにしてくれて、思いもよらぬところから「それ、面白いね」と言ってもらえ、イギリスの先生方と一緒に慈善社会学に関する本の一部を担当させていただき、今度出版することが

決まりました。

渡辺 佐藤さんは、私が何もしないのにイギリスコミュニティ生活にもう本当に入り込んでいて、え、そんなことしてんの？みたいな。素晴らしいかったです。すごく覚えてるのが、お子さんの学校のチャリティ活動を通して地域につながっていた点。日本だったら自治会とかかたかた入っていくと思うんですけどね。佐藤さんはチャリティをする人とつながるんだみたいな気づきもあって。

佐藤 チャリティってお金やりとりだけじゃないところがありますよね。イギリスのチャリティって、日本の考えるチャリティよりももっとエンターテイメント性がいっぱい詰まってるって、そういうところはすごく勉強になりましたね。まず、大人も子どもも楽しい。これからの新しい社会教育とか自治の在り方みたいなところのヒントになりそうかな種がすごくあったような気がします。

西山 チャリティのことを私なりに補足させていただくと、日本人がチャリティって聞くと、「それは西山バザーか」みたいな、そういう印象しかないと思います。けれどイギリスにおけるチャリティという言葉が指す領域や意味はとても広いので、日本でここ十年ぐらいファンドレイジングって叫んでいるその源流の一つとしての在り方も含まれていますし、活動をいかにゼロベースで作っていくのかっていうところの考え方をアシストしてくれるような学びもあります。

全てがいいとは思っていないんですけれど、

ちになつていなくなったりするよくわからないことにもつながってきているのが、楽しませてもらえてるところなんだろうなと思います。渡辺さんの場合は、大学に制度とか枠組みがあって、評価があるからという理由などで最終的にやらされ感はあるけれども、そこでひねり出して楽しんでおられるなっていう感じが思いました。

佐藤さんは、話していてスルスルっと人とつながるのが早いし上手だなと思いました。ついでこの間オンラインで一緒になった人とSNSでつながってる素早さは、佐藤さんピカイチで、私なんかは申請が来てもこの人誰やろな？みたいに放置されてるリストが長くなっています。

私は自分の意志というよりは、誰かに操ら



公民館とデザインは、なにを夢見たのか？

～雑談がうまれる場所と、そのためのDesignをめぐる～

2026年2月26日から3月16日まで、東京ミッドタウン・デザインハブにて「公民館とデザインは、なにを夢見たのか？～雑談がうまれる場所と、そのためのDesignをめぐる～」展が開催されました。このイベントは、2023年に開催された「公民館のしあさってはデザインのしあさって!？」に続く社会教育とデザインに注目した企画展の第2弾でした。

期間中には10回ものトークイベントが開催され、そのうちの第4回には佐藤さんが、最終回には本鼎談をきっかけに渡辺さんがそれぞれ登壇されました。

イベントは終了していますが、本展の趣旨や概要などをお読みいただくと、西山さ

んの助成プロジェクトをより深く知ることができますので、ぜひご覧ください。(トヨタ財団広報 新出洋子)



ど、でもその考えるヒントにつながってくるような領域と意味が、イギリスにおけるチャリティにはバザーの百倍ぐらいある。そこから佐藤さんがおっしゃっているような学びとか、次につながってくるようなことはめっちゃあるんじゃないかなと思います。

*

加賀 最後に今日の感想などをおうかがいしたいと思います。

佐藤 私、最近博士論文をずーっと書いていて…、こうやって4、5人で話す機会が日常も含めあんまりなかったんですね。なので集まって話すことで脳のいろんなところが刺激される感じがすごくあります。少し考えたら面白いことがもつと湧いてきそうだなっていうワクワク感で今いっぱいです。

西山 今回の「つながり」っていうテーマをいただいて私がなんとなく想像したのは、たまたまがたまたまを生んで、たまたまにつながってくるのがつながりなんじゃないかなと思っていて。でもたまたまっていうと、それは偶然の話でしょ？みたいなことがよく取り沙汰されるんですが、神さまみたいなそういう人がもしいるんだとすると、たまたまという名の必然で、私はいろんなところに連れて行かれて、私が自ら動いてるわけじゃなくて、夢遊病のようにフラフラと世の中に出させてくれて、そのたまたまつながっていくものが、たまたまなぜかエジプトに公民館を作らなくちゃいけなくなったり、まだかた

ないけど、遊びや楽しい経験をして、防災について考えるきっかけを作りたいんですけどおっしゃっていました。違う自治体の人でも同じようなそのきっかけという言葉を使っていまして、すごく面白いなと思って。そのちよつとの方向転換をできるきっかけってすごく大事なんだなと。

渡辺 とか楽しいっていうことは方向転換するきっかけになると思うので、このような集まりも、佐藤さんがおっしゃってたちよつと自分をぶっ壊すみたいな、普段の自分とは違うことをするって佐藤さんの性格だと思わんですけれど、すごく勉強になりました。ある程度自分を壊すような感じで、日常とはちよつと違うきっかけを作り続ける。そこに新しいつながりが生まれるんだなと思いました。

私たちの取り組み

—— 助成対象者からの寄稿

今号は国際助成プログラムから田中雅子さん、国内助成プログラムから栗林知絵子さんにご寄稿いただきました。



2022年度国際助成プログラム

「助成題目」日本と出身国を往來する移民の子どもの社会再統合を見据えた言語教育
母語・公用語の補習教室を地域の「多文化共生の拠点」

「多文化共生」の先へ 移民の子どもたちのことばをみんなのことばに

● 田中雅子（上智大学総合グローバル学部教員）

不安を抱えながら生きる移民の子どもたち

日本において移民の子どもの教育と一言えば、日本での「社会統合」を目的とした日本語教育だけが重視されているのが現状です。出身国に戻った場合の「社会再統合」は、制度上ほとんど想定されておらず、その結果、出身国の学校教育で必要な母国語の運用能力を維持することは困難な状況にあります。

「子どもの権利条約」は、子どもが自己の文化的アイデンティティ、言語、価値を尊重される権利を有することを明記し、とりわけ少数者や移民の子どもについて、その言語的・文化的背景への配慮を締約国に求めています。

「住宅学習」の回答の割合が他地域より高く、「勉強していない」という回答の割合は低かったです。大阪の府立高校などで母語教育が導入されていることが影響しています。ホスト社会が公立校での母語教育に力を入れれば、移民の子どもたちは学外でも母語学習の意欲を高める可能性が示唆されます。

兵庫県立芦屋国際中等教育学校には、全生徒が多様な言語や文化を学ぶ「芦屋インターナショナル・タイム」という科目があります。2023年度は、中国語、韓国・朝鮮語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、タガログ語、ネパール語の7言語から、生徒は一つ選んで学習していました。ネパール語の場合、



右ページ上：兵庫県立芦屋国際中等教育学校の校長室にある生徒の出身国の国旗
上：名古屋ネパール語教室

す。日本も締約国の一つですが、移民の子どもの母語教育は、家庭や移民コミュニティに任されており、政府や自治体はほとんど関与していません。日常的な家庭内会話は可能であっても、母語の読み書き能力を十分に身につけていない子どもも少なくありません。

2025年6月末現在の在留外国人統計によれば、18歳未満の子どもは約37万人にのぼり、そのうち4割以上に当たる約15万人が「家族滞在」の在留資格で暮らしています。彼らは、親が仕事を失ったり、亡くなったりすると、在留資格を失います。また、在留資格がない非正規滞在の子どももいます。彼らは、日本生まれであっても、いつまで日本で暮ら

授業に参加するのは、ネパール出身の生徒だけではありません。私が見学した際、ネパールのダンスを熱心に学んでいたのはカナダ出身の生徒でした。ネパール出身の生徒は、同級生が自分の言葉を一緒に学ぶことを誇らしく思っているようでした。

みんなでみんなのことばを学び合う

山口県や福岡県を中心に「まちライブラリー」の活動を展開している一般社団法人多言語図書館は、「地域で暮らす仲間のことばを学ぶ語学学習会」を開催しています。「まちですれ違ふとき、挨拶ができる関係になりたい」という気持ちから始まったそうです。ベトナム語、インドネシア語、中国語、ポルトガル語の学習会を行っており、小学生から60歳代まで幅広い年代の人たちが参加しているそうです。

先述の調査結果や各地の実践は、『移動する子どもたちのことばの教育——多様なアクターによる母語・継承語教育の現在と未来』（田中雅子・坂本光代編著、明石書店、2025年）に収録しました。

2026年1月10日に開催した出版記念シンポジウムで愛知県名古屋市のネパール語教室を紹介しました。ここでは移民の子どもだけでなく、日本人の大人も学んでいます。学校で日本語支援をしている人は、子どもたちに日本語を教えるだけでは、関係性が「不公平」だと感じたことがきっかけで、

せるかわからない不安を抱えながら生きていくのです。

問うべきはホスト社会の制度

私たちが実施したプロジェクトは、移民の子どもたちをとりまく問題を「彼ら＝移民側の問題」として捉えるのではなく、「私たち＝ホスト社会」の制度やあり方そのものを問い直すことを目的としました。言語教育だけではなく、在留資格制度や、英語以外の言語を軽視してきた外国語教育のあり方、単発のイベントにとどまりがちで人権保障に結びつかない「多文化共生」施策について、批判的に検証することを目指しました。

まず、「外国につながる子どもと若者の言語使用についてのアンケート」調査を行いました。19か国出身の13歳から25歳までの447人が参加してくれました。「母語や母国語の学習の場」に関する質問には、59.3%が「勉強していない」と回答しました。約6割の子どもや若者が、母語・母国語を体系的に学ぶ機会をもっていないことが明らかになりました。地域別に首都圏、関西圏、中京圏を見ると、関西圏では「公立校の母語・母国語授業」と「テキストを使った自

ネパール語教室に通うようになったという経緯を話してくれました。「彼ら」のための母語教室としてだけではなく、「私たち」が変わるためのネパール語教室であることがわかる報告でした。

このシンポジウムで、読者の立場から本書の意義を語ってくださった東京都立大学の松田真希子教授は、子どものアイデンティティ形成において重要なのは「周りがどう変わっていくか」であり、顔の見える親密圏で「みんなでみんなのことばを学び合う」ことが、これからのことばの教育や活動の中心になっていくという話をしてくださいました。各地で行われている「母語」を越える実践は、ホスト社会の変化を促す場になります。「多文化共生」の先にある試みとして、広めていきたいです。



『移動する子どもたちのことばの教育——多様なアクターによる母語・継承語教育の現在と未来』（田中雅子・坂本光代編著、明石書店、2025年）本助成プログラムの成果物となる本書は、2018年度国内助成プログラム「外国人と交流から共生へ——ちがひが文化共生への挑戦」代表の式部絢子氏より、書評をお寄せいただいています。31ページも併せてご覧ください。



「出会い」から生まれる豊島区の未来 ―しまこどもつながるプロジェクトの歩みと展望

● 栗林知絵子
(特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク)

子どもたちのおかれた状況

シングルマザーのAさんは小学生の娘Bさんと2人で暮らしていますが、コロナ禍でパート先の居酒屋が休業となり収入がゼロになってしまいました。扶養手当が出ない月であり、自分の食事も制限して、子どもの食事を確保するなど、ギリギリの生活をしています。Bさんは、母親の苦勞を知っているため、学校から持参を求められた必需品について言い出せず、またいつも忙しそうなお母様に宿題の分からないことも聞けないでいます。しかし、Aさんの実家も遠方で、Bさんには地域に相談できる人はいません。

豊島区においては、約2割の子どもたちが生活困難層にあり、ひとり親世帯の約半数が生活困難層にあります。また、親・子どもともに相談する先がないと答えるなど孤立傾向にあります(豊島区の小学5年生の約7

人に1人が相談先がないと回答し、親も約10%弱が相談先がないと回答)(豊島区「子どもの生活実態に関する分析報告書」東京都子供の生活実態調査データを用いて「平成30年3月、首都大学東京子ども・若者貧困研究センター」。

地域で暮らす大人の状況

CさんはAさんたちと同じ地域にオフィスのある会社に勤務する会社員ですが、いつも通勤時に道ですれ違う小学生Bさんのことが気にかかっています。暗い顔をして下を向いて歩いており、着ている服もいつも同じもののように見えます。心配ですが、なんと声をかけて良いかは分からず日々が過ぎていきます。

しまこどもつながるプロジェクトへ

このような方々を念頭に「無関心(支援活動を知らない)」「無関心(身近に活動がある



流会)の開催、地域での認知向上を目指した情報発信を行う「つながるメディア」の運営、そして企業とNPOをマッチングするなど「つながるお手伝い」の3つを柱として活動してきました。これらを通じて地域の中で子どものことを思う人たちが集まり、「しまこども団」と名づけ、素敵なロゴを作成し、広く子どもたちのために動く人々団員の輪を広げていく取り組みを続けてきました。以下、その活動をお伝えしていきます。

「つながる交流会」での議論と取り組みの深化

この会議は、2022年の事業開始から全9回、260人の参加がありました。子どもの不登校、外国にルーツを持つ子ども、フードバンク等の食支援のあり方などのテーマで発表者の発題、参加者による議論を大切にしてきました。単なる情報交換の場を超えて、具体的なアイデアや活動が生まれてくる場となっています。

たとえば、「食」をテーマとした会議では企業から実際に行っている食を通じた子どもへの支援についての発表がありました。そこで、不登校の子ども支援関係者から「支援対象に不登校で自宅にいる子どもも対象に入れてはどうか」という提案があり、企業担当者が新たな気づきを得るということがありました。

また別の会議ではフードバンク支援団体や、豊島区民社会福祉協議会なども参加して発表を行った後に、食の支援を広げるための具体的な方策について議論が深まりました。



ことを知る)へ、「関心」を「行動」に、「当事者」を「支援者」へ変えていくプラットフォームを構築し、地域一体となって、こども・子育て世帯を支え、暮らしやすい「まち」とするために本プロジェクトを立ち上げました。実際に困難な状態にある子どもたちの支援活動をするともに、同時に子どもの貧困・孤立の認知を広げて関心を醸成することで多くの人の参加を促すプラットフォームを作ることを目指し、同じ問題意識をもつ企業、NPO、個人などが集まり「しまこどもつながるプロジェクト」を始動しました。

具体的には地域の子どものために活動を希望する、もしくはすでに活動している多様な関係者がテーマを決めて話し合う「しまこどもつながる交流会」(以下、つながる交

責任をもって団体を運営する人がいたら、予算や場所も提供できるのに……)という議論の中で、その場に参加していた地域に住む30代の若者が「自分が代表をやります」と手を挙げたことで、一気に実現へと動き出す、ということがありました。

また、外国にルーツを持つ子どもについては2回にわたり「つながる会議」にて議論がなされました。中学校のPTA関係者や地域の個人支援者、社会福祉協議会、NPOなど多様な関係者が参加し、支援の必要性について意見が交わされました。この会議での議論も踏まえ、豊島区において学校や関係機関等と連携して適切な支援につなげる専門家「多文化キッズコーディネーター」の予算化へとつながりました。

多様な関係者の参画

本プロジェクトのもう一つの大きな成果は、地域におけるさまざまな関係者の参画を引き出しているところです。事務局として民間企業やロータリークラブ関係者、地元の法律事務所、NPOが加わり、専門性、場所、時間の提供などそれぞれが持ち寄れるものを集め、子どものためのプラットフォーム、「こども団」を構成しています。

助成事業としては一区切りとなりましたが、引き続き、多くの「団員」とともに、地域で子どもが誰も取り残されず、安心して育つことができるための活動を続けていきたいと考えています。



右：地域貢献メッセ
左：つながる交流会

助成から10年の今と未来

山下賢太

東シナ海の小さな島
ブランド株式会社

[プログラム]
2015年度 国内助成プログラム

[助成題目]
KOSHIKI DESIGN CAMP を
通じた島の未来を照らす仕事
創りプロジェクト

インタビュアー ● 鷲澤なつみ (PO)
執筆 ● 武田信晃 (フリーライター)



2016年4事業、2026年21事業。進化する甑島。 半径400メートルで完結するコミュニティづくり

トヨタ財団では現在ウェブサイトにて、過去に助成を行ったプロジェクトにスポットをあてた「助成から10年の今と未来」と題したインタビュー記事を公開しています。今回は鹿児島県の西北部にある甑島(こしきしま)列島で、「東シナ海の小さな島ブランド株式会社(通称: アイランドカンパニー)」を運営している山下賢太さんにお話をおうかがいしてきました。ウェブでは本誌内容の拡大版を掲載していますので、ぜひそちらもご覧ください。

過去10年間で事業の数は4から21へ

トヨタ財団から実際に助成を受けたところは、FUJYA HOSTEL、豆腐販売の山下商店、カフェのコシキテラス、米づくりなど4つぐらの事業だったが、今や21事業にまで拡大した。

山下社長が新事業をする基準は、島民から求められたものや困りことからきていることが多いと思う。「モノを売るための営業活動はしません、新事業を始める時は、フィールドワークとヒアリングをかなりやります。そうすれば、何が求められているのか具体的にわかりますし、勝手に求められるようにもなりません(笑)。自分の中にある、誰かを助きたい! 何か力になりたい! という思いがビジネスとしても成り立つのです。そうすると、コーヒーが飲める場所があつてよかった、豆腐屋があつてよかったと言ってくれる人が増えていくのです」

山下社長は「コミュニティが適正に回るのは「半径400メートル」だと考えている。

「半径400メートルの輪がいたるところで、たくさん重なり合っていると思うって下さい。半径400メートル圏内の内側にいる人と外側にいる人は、生活圏が変わりませんが、重なり合う部分にしっかりとしたインフラを整え、公共サービスを用意すれば、誰にとっても住み心地のいい居場所が街にできるので。甑島での自立の概念は、自分の足で立つことではなく、他力本願によって成り立つ社会をどう作るか、たくさん頼れる先をどう作っていくかです。これを作るために尽力し

てきました」と、自立の最小単位は「1人」ではなく、「コミュニティ」なのだ。

今、力を入れているのが不動産関連事業で「島守」という会社を設立した。空き家、遊休不動産などの保守管理や運用、Uターンなどの移住・定住や交流人口の拡大を目指す。将来的には森を育てる大工を育成し、木材を製材できるマイクロ製材所を立ち上げて林業を営みたいと考えているが、ここには深い意図が隠されている。

「今後、一酸化炭素の排出権取引において、手付かずだった森がお金に変わる。この財源を生かして、さらにまちづくりを進める仕組みを構築したい」

さらに2025年7月には「一般財団法人がこしま島嶼ファンド」を設立。「トヨタ財団からの助成を受けたことによって、財団とは何かと初めて向き合う事ができました。困っていること、悩んでいること、想いはあるけど仲間がいらないみたいについて外に頼れる先としてトヨタ財団がいてくれました。自分が

やっていることはこれでいいんだ! って背中を押してもらえました。この経験を受けて、今度は鹿児島島の島々にお返しをしているだけなんです

「甑島に戻ってこると思う」愛娘の言葉

甑島を魅力がある島にするには、結局のところ、人間の関係性が重要だということに悟った。

「たとえば、都会で道路工事に遭遇すると、本来は自分たちの暮らしを支えるために公共事業やインフラ工事してくれている人になりがとうという気持ちになるはずなのに、『騒音』と言われてしまいます。システムも必要だけど、良質な関係性を作り直すことがこの国にとって大事なことだと思います。なので、大勢の人が『ありがとう』などを普通に言えるようになる、日本は持ち直せるのではと思えますね」

山下社長は、ある時、11歳になる長女から「父ちゃん、私はいつかこの島に帰ってくる

と思う。だから早く外の世界に行きたい」と言われた。娘は、いつか帰ってくると自分の中で感じているからこそ、逆に外の世界を見たいと感じているのだ。島を出た後、帰っておいでとか、会社の跡継ぎをしてほしいとかも言ったことも、話をしたことない。

「経営は大変ですが、娘たちには、私が楽しそうに見える、少なくとも苦しい顔をして生きてないのは伝わったのでしょうか。そういう、(島を想つ)心みたいなものは伝わるんだなっと思っていました。心って後回しにされがちですが、やっぱり大事なことだと娘から逆に教わりました」。まさに、山下社長がやってきた取り組みが間違っていないかと言えぬ娘の言葉だった。

アイランドカンパニーの着実な歩みが街おこしに貢献した結果、「第16回地域再生大賞」(2025年度)の大賞を受賞するまでになった。今後は山下社長が話したように、他の離島にこのノウハウを広げ、離島に活気をとり戻せることができるかどうか、注目だ。



トヨタ財団のウェブサイトでは、本誌情報ははじめ、助成対象者の活動を紹介しています。

特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」

助成番号	題目 代表者氏名 代表者所属	助成金額 (万円)
D25-MG-0016	外国人材が能力を最大限発揮できる社会環境作りのための多様性憲章と社会統合講習 近藤 敦 名城大学法学部 教授	800
D25-MG-0032	外国人材との共生策と空間整備を組み合わせる都市計画手法の提言～少子高齢化・人口減少で生まれる空き空間の有効再活用～ 藤井さやか 筑波大学システム情報系 教授	700
D25-MG-0038	摩擦を地域のつながりに変えるプロジェクト——うわさの背景に向き合う研修開発と全国ネットワーク形成—— 関 聡介 外国人法律相談 副代表	900
D25-MG-0058	持続可能な多文化共生圏の構築を通じた農村における外国人材育成プロジェクト 申 明直 熊本学園大学外国語学部 教授	500
D25-MG-0060	移民2世のキャリア選択肢の拡大と地域産業のデジタル業務外部化による地域活性化——小口業務を核とした実装モデル—— 鈴木 真帆 認定特定非営利活動法人アイキャン 代表理事	800
D25-MG-0066	オンライン診療×多職種ネットワークによる外国人医療アクセス改革プロジェクト 弓野 綾 横浜市寿町健康福祉交流センター診療所 東京大学大学院医学系研究科医学教育国際協力学部部門 総合診療医／特任助教	1,000
D25-MG-0068	外国人介護人材の支援体制構築に向けた動画教材および協働的コミュニケーション研修プログラム開発 武田裕子 順天堂大学大学院医学研究科医学教育学 教授	800

特定課題「人口減少と日本社会」

助成番号	題目 代表者氏名 プロジェクトチーム名	助成金額 (万円)
D25-SR-0011	ペリフェラル・コアを基軸とした都市圏辺縁生活圏モデルの構築と検証 青木 嵩 ペリフェラル・コア生活圏共創コンソーシアム	930
D25-SR-0013	人口減少社会と公共施設の『クリエイティブな解体』：未来の風景を探る 矢ヶ部慎一 『クリエイティブな解体』探求チーム	837
D25-SR-0015	県内型二地域居住促進の態度行動変容アプローチの開発と評価 羽鳥剛史 県内型二地域居住促進プロジェクトチーム	655
D25-SR-0026	移動型 ES としての移動スーパーの多機能化・持続化に関する中国地方横断実証研究 石原達也 移動スーパーの多機能化・持続化に関する中国地方連携調査研究チーム	900
D25-SR-0028	多拠点生活から考える専門人材活用モデルと制度設計 荒川裕貴 次世代自治共創会議・専門人材活用プロジェクトチーム	856
D25-SR-0041	子どもが産まれたらチームを：頼れる社会と家族支援モデルの構築 兼城裕奈 チームみんなで子育て	844

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」・「外国人材の受け入れと日本社会」・「人口減少と日本社会」

2025年度プロジェクト一覧

2025年度に採択された特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」9件、特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」7件、特定課題「人口減少と日本社会」6件のプロジェクト一覧です。

※掲載内容は2026年3月18日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」 共同研究

助成番号	題目 代表者氏名 代表者所属	助成金額 (万円)
D25-ST-0014	気象×AIがつくる病気が起こる前に備える医療社会：医療需要予測AIによる消防・医療・患者の行動変容を導く社会実装研究 川越康仁 聖マリアンナ医科大学医学部循環器内科学 助教	870
D25-ST-0046	建設用3Dプリンタのブラックボックスを解く：内部可視化技術による「品質 管理の共通言語」の確立と社会共創 福山智子 立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 教授	870
D25-ST-0048	視覚障害者の相談支援におけるAI活用のリスクと倫理的利用条件の解明 奈良里紗 大阪教育大学総合教育系特別支援教育部門 准教授	880
D25-ST-0081	通信制高校における多様なニーズを考慮した教師・生徒をつなぐ生成AI進路指導支援システムの開発 澁川幸加 中央大学文学部教育学専攻 特任助教	800
D25-ST-0089	生成AIと人類学によるデジタル公共圏の再構築 菅原裕輝 大阪大学大学院人文学研究科人文学林 講師	510
D25-ST-0092	先端的AI相談に基づく、ハイブリッド型孤独・孤立対策の設計原則と制度的含意に関する実証研究 金子 萌 株式会社想ひ人 代表取締役	800

個人研究

助成番号	題目 代表者氏名 代表者所属	助成金額 (万円)
D25-ST-0015	生成AIが変える語彙経験：認知負荷の委譲が生む新たな言語差 鄭 弯弯 名古屋大学大学院人文学研究科附属人文知共創センター 講師	140
D25-ST-0040	科学館におけるデジタルハンズ・オン展示の学習価値生成と活用条件：導入・体験・設計思想の統合的実証研究 森 沙耶 北海道大学大学院教育学院 博士後期課程	170
D25-ST-0090	Living Lab 気仙沼「共に生きる未来をプロトタイプする」：地域の生活世界から探る新技術導入の可能性 五十嵐 光 特定非営利活動法人ウィメンズアイ テクノロジーアドバイザー	170



2026年度事業計画

トヨタ財団の本年度「事業計画」が決まりました。その概要をお知らせいたします。

当財団は、1974年の創設以来、生活の質の向上、自然環境の保全、社会福祉の充実、教育・文化活動の振興などにつながる意欲的・創造的な研究や事業に対して、多彩な枠組みによる助成を実施してきました。

本年度においてもそうした方針の下、昨年度と同様、「国内」「研究」「国際」の3つの助成プログラム、「先端技術と共創する新たな人間社会」「外国人材の受け入れと日本社会」「人口減少と日本社会」の3つの特定課題、イニシアティブプログラムという枠組みを設け、人々のより一層の幸せの実現に向けた助成事業を展開していきます。

新型コロナウイルス感染症拡大以降、特に注力してきた新しい産業技術の適切な社会実装による人々の「つながり」や「交流」のあるべき姿の構想と具体化について、引き続きすべてのプログラムにおいて重点を置き助成を実施するとともに、世界各地で人や社会のつながりが変化する中で、人々の幸せを作り出す次の時代

の新たなつながり方を、プログラム横断で模索していく新たな事業に着手、同時にトヨタ財団の認知・プレゼンス向上及び社会貢献活動に関心を持つ人々のさらなる拡大にもつなげていきます。

国内助成プログラム

「新常态における新たな着想に基づく自治社会の推進」をテーマとした公募を行う。「2」地域社会は前年度までを踏襲し、「1」日本社会はプログラムの趣旨により適うよう、選考委員会で議論された内容を元に、これからの自治型社会を構想し、その推進に向けた環境整備（多種多様なアクターの協力関係による取り組みの検証や形式知化、各地域の自治の力を高める共通項の探求や知見の一般化など）を主眼とした応募が増えるよう募集要項や企画書の見直しを行う。

また、公募説明会に関しては、昨年度に試行した3プログラム（国内・研究・国際）合同

参加する。

2025年度の選考で3名採用の予定だったため、本年度に再度選考を行い、1名を追加採用する。

●募集概要

「テーマ」 つながりがデザインする未来の社会システム
「助成予定金額」 総額2000万円/年「主に人件費に充当」

「助成期間」

2027年4月から2028年3月
(進捗報告を受けたうえで単年度単位で助成を決定)

共同研究プログラム

前年度に引き続き、「つながりがデザインする未来の社会システム」というテーマのもと、社会システムの変革を促すような挑戦的な研究プロジェクトを、分野・領域を限定せず幅広く募集する。

助成対象者の交流をより一層促進するとともに、助成プログラムの向上に向けた取り組みを強化していく。

●募集概要

「テーマ」 つながりがデザインする未来の社会シス

でのオンライン説明会を継続すると共に、国内助成プログラム単独では例年通り財団主催（オンライン）と各地のNPO支援/中間支援組織との共催（現地対面）の2パターンで複数回の説明会を開催する。

助成対象プロジェクトのフォローアップ（自主事業関連）については、近年の取り組みを通じて積み上がってきている選考委員や外部有識者・組織も交えた場づくりや仕掛けなどのさらなる充実を図る。

「トヨタNPOカレッジ カイケツNext」は、前年度の実施内容を踏まえた見直しを行い、引き続き2地域での入門編と少人数制でのアドバンス編を実施する。

●募集概要

「テーマ」 新常态における新たな着想に基づく自治型社会の推進

「助成カテゴリー」

1) 日本における自治型社会の一層の推進に寄与するシステムの創出と人材の育成
2) 地域における自治を推進するための基盤づくり

テム

「募集時期」

2026年4月～6月

「助成予定金額」

総額6000万円「上限800万円程度/件」

「助成期間」

2026年11月から2年間

国際助成プログラム

2025年度と同様、基本テーマと趣旨を継続して、助成プログラムを実施する。

本年度は、助成対象者同士の対話（座談会）を開催し、その様子を収録した動画を制作・公開する。また、国内外の助成財団プログラムオフィサー（PO）などの知見共有の機会も引き続き設ける。

●募集概要

「テーマ」 アジアの共通課題と相互交流——学びあいから共感へ——

「対象国」

東アジア・東南アジア・南アジアの国・地域
・東アジア：日本、中国、香港、マカオ、台湾、韓国、モンゴル

研究助成プログラム

テーマ「つながりがデザインする未来の社会システム」のもと、引き続き「協働事業プログラム」と「共同研究プログラム」を実施する。

協働事業プログラム

東京大学未来ビジョン研究センター（IIF）との協働により、若手研究者に対する安定した研究活動の場を提供し、その育成を支援する。2025年に採用された2名のフェローによる研究プロジェクトを支援する。また、研究助成の助成対象者との交流を深めるために、フェローは合同ワークショップ等に

- ・東南アジア：ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、東ティモール、ベトナム
- ・南アジア：バングラデシュ、ブータン、インド、モルディブ、ネパール、パキスタン、スリランカ

〔対象プロジェクト〕

対象国の2国以上が関わるアジアの共通課題について、学びあいによる相互理解を深め、レビュー及び提言や作品の制作を行うもの

〔必須となる活動〕

学びあいの手法として、他国の現場訪問・相互交流

〔募集時期〕

2026年4月～5月

〔助成予定金額〕

総額8000万円

- ・1年プロジェクト「上限500万円/件」
- ・2年プロジェクト「上限1000万円/件」

〔助成期間〕

2026年11月から1年または2年間

特定課題

先端技術と共創する新たな人間社会

基本テーマを継続し、助成対象にかかわる枠組みも共同研究プロジェクトと個人研究プロジェクトの2本立てとする。

近年の応募件数増加に対応し、予算を4500万円から5500万円に増額する。5000万円を共同研究プロジェクトの枠組みに、500万円を個人研究プロジェクトの枠組みにあてる。

●募集概要

〔テーマ〕

先端技術と共創する新たな人間社会

〔募集時期〕

2026年9月～11月(予定)

〔助成予定金額〕

総額5500万円

- ・共同研究プロジェクト：5000万円程度
- 〔500～1000万円程度/件〕
- ・個人研究プロジェクト：500万円程度
- 〔100～200万円程度/件〕

〔助成期間〕

2027年5月から最長3年間(1年、2年または3年間)

し、選考委員を交えての各プロジェクトの深掘りや関係者間での交流の機会を創出する。

●募集概要

〔テーマ〕

人口減少と日本社会

〔募集時期〕

2026年9月～11月(予定)

〔助成予定金額〕

総額4500万円

〔500～1000万円/件〕

〔助成期間〕

2027年5月から2年または3年間

イニシアティブプログラム

本年度も引き続き、トヨタ財団として支援の意義が大きい、主体的・能動的に取り組むべきと考えるプロジェクトを積極的に発掘していく。

また、過去に助成したプロジェクトの成果や手法などをインパクトのある形で社会に発信・普及させることを目的とするプロジェクトへの助成も行うとともに、シンポジウム開催による成果発信も行う。

加えて、次年度以降のプログラム化を目指し、パイロットプログラムとして実施するプロジェクトへの助成も行う。

●プログラム内容

〔対象プロジェクト〕

民間財団として支援の意義の大きいプロジェクト

- ・財団独自の調査活動や研究会と連携するプロジェクトや他組織との共同助成
- ・NPOの基盤強化や市民参加など非営利セクターの発展に資するプロジェクト

公募プログラムにおけるモニタリングなどを通して、より大きな成果に結びつくと財団として判断したプロジェクト

- ・書籍の出版のみならず、映像媒体(映画・ビデオ・DVD・漫画など)、デジタル媒体(ホームページ・メールマガジンなど)やシンポジウム、ワークショップ、メディアの活用など多様な方法を通じての成果の社会発信

次年度以降のプログラム化を目指し、パイロットプログラムとして実施するプロジェクト

- ・次世代アカデミアリーダー育成に向けたシード資金的助成や、高校生・大学生の地域イノベーション活動支援など、新たな「つながり」を作り出す若手人材育成を行うプロジェクト

〔助成予定金額〕

総額8000万円

外国人材の受け入れと日本社会

助成プログラムの内容及び募集時期に関しては、2025年度と同様の内容とする。これまでの助成対象関係者同士の知見共有を促す情報交換会を開催する。

●募集概要

〔テーマ〕

外国人材の受け入れと日本社会

〔募集時期〕

2026年9月～11月(予定)

〔助成予定金額〕

総額5500万円

〔助成期間〕

2027年5月から2年または3年間

人口減少と日本社会

助成分野や応募要件などは前年度と同様とし、本プログラムの周知を図り、応募件数の増加や応募プロジェクトの水準の向上に努める。

助成対象プロジェクトのフォローアップとして、2025年度助成対象者へのキックオフ研修(贈呈式と同日開催)に併せて、2024年度助成対象者の中間研修を実施

2026年度春公募スタート

国際助成プログラム

〔募集期間〕

4月1日(水)～5月30日(土)

研究助成プログラム

〔募集期間〕

4月1日(水)～6月5日(金)

国内助成プログラム

〔募集期間〕

4月1日(水)～6月3日(水)

私

「リビングラボ」の研究をしている。私といっても、「リビングラボ」が何かを知らない方も多いだろう。リビングラボとは一言でいえば、「生活環境の中で、多様な人々が協働しながら課題解決や価値創出を行うための共創の仕組み」のことである。クローズドな研究室／ラボではなく、実際の都市や地域そのものを共創や実験の場と見立て、市民、企業、行政、研究者が相互に交わりながら、新しいサービスや製品、活動、制度などを生み出していく。ソーシャルイノベーションや社会課題解決を実現するためのアプローチとして、国際的にも注目されているコンセプトである。

リビングラボの本質は「共創」である。共創という言葉自体は、最近ではすっかり一般的になっている。しかしながら、実際に共創を実践することは決して容易ではない。現代社会は、組織、専門、役割が細かく分化しており、それぞれが異なる論理や評価基準のもとで動いている。その境界を越えて、異なる立場の人々がフラットに對話し、同じ方向を向いて何かをつくり出すことは、ある種の「理想」としては語られても、現実の実践においては多くの摩擦や困難さを伴う。

私は、トヨタ財団からの助成をいただき、「Infrastructure Living Labs:リビングラボ実践を支えるインフラストラクチャ構築」という研究を行っている。これは、日本の社会文化的文脈にあったリビングラボの方法論をつくることをめざす研究プロジェクトである。

共創プロジェクトやその成果物の集合体のことではなく、課題解決や価値創出をしようとしていくさまざまな個人や組織が出入りし、出会い、共に試行錯誤を繰り返せる「共創のための基盤・土壌」を社会の中につくる営みに他ならないのである。

こういった、「プラットフォーム」という視点に注目すると、リビングラボや共創研究における問いの立て方自体が変わってくる。つまり、「いかに共創を成功させるか？」という問いから、「さまざまな個人や組織が共創できる環境をいかにして構築し、社会のインフラと根付かせるか？」という問いへの転換である。個別のプロジェクトの成功はもちろん重要である。しかしながら、それだけではなく、異なる人々が出会い、試し、失敗し、学び続けるためのインフラが社会に根付いていることが、長期的には大きな社会的価値を持つ。そういったインフラがあることで、先端的な技術(を創っている企業や研究者)と生活現場や都市・地域社会がしっかりと接点を持ち、共に未来をつくっていくことにつながる。

これまでの研究で行ってきたこと(リビングラボ実践を支援するツールの開発や、リビングラボ実践者が交流するコミュニティの構築など)は、まさに、共創インフラの構成要素を部分的につくる取り組みだったと位置づけられる。

一方、助成期間も終わりに近づき、よく考えるのは、共創インフラをより広く構築していくために、「研究者としての私は、本質的に

私のまなざし 45

共創のためのインフラ構築をめざして

写真・文 ● 赤坂文弥

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 人間社会拡張研究部門



本研究で実施した対話型イベントの様子



リビングラボの国際会議でベストペーパー賞を受賞



おやまちリビングラボの事例分析をしている様子



リビングラボが地域からどのような影響を受け、どのように(紆余曲折しながら)進んだか?の分析

る。これまでに、日本各地でリビングラボ的な実践を長期的に行っている人たちへのインタビューを行い、日本の社会文化的文脈の中で効果的かつ継続的にリビングラボを実践するためのヒントを探索、抽出してきた。また、その成果を活用し、リビングラボの立ち上げやマネジメント(管理)のために活用可能な各種ツールも開発してきた。

本

研究を通じて見えてきたのは、「リビングラボ」という場を、「共創プロジェクト」と「共創プラットフォーム」という二つの層(レイヤー)に分けて捉える」という考え方である。共創プロジェクトとは、何らかの目的に対して様々なステークホルダーが共創して取り組む、時限的な活動のことをさす。一方、共創プラットフォームとは、そういったプロジェクトを支える仕組みのことをさす。これまでのリビングラボ研究では、国内外を問わず、どうしても個別の「共創プロジェクト」に注目が集まりがちだった。つまり、どんなテーマで、何を、どんな成果が出たのか、といった点である。

しかしながら、それ以上に重要なのは、各種プロジェクトを支えている「プラットフォーム」の存在である。物理的な場(例:共創を行うスペース、社会実験ができる場)、人材(例:オーケストレーションできる人、協力してくれる市民)、知識(例:共創のノウハウや手法)など、共創を下支えするための仕組みがなければ、プロジェクトはうまく回らない。つまり、リビングラボとは、単なる

何をすべきなのだろうか?という問いである。その意味で、最近強く感じているのは、「リビングラボや共創の現場で起きていることや、そこで生み出された工夫や知恵を、(概念)や(言葉)にすること」の重要性である。リビングラボの実践者は日々、試行錯誤を重ねながら、多くの知恵や工夫を生み出している。しかし、それらは往々にして、暗黙知のまま埋もれてしまう。そういった、表舞台には出てこない(共創の実践知)を概念として言語化することで、多くの人が参照できる(知識)として発信・蓄積することができる。そういった実践知も、共創を効果的に進めるためのインフラの一部になりうるのである。また、このように、ローカルな実践を概念化・知識化することは、実践者自身をエンパワーすることにもつながる。

そういった過程を通じて、さまざまな実践知を紡ぎ、リビングラボ/共創に関する(知の体系)をつくり、リビングラボを社会におけるより(当たり前)的な存在にしていくことが、研究者としての私が担うべき役割なのかもしれない。決して派手で分かりやすい研究ではないが、そんなことを考えながら、今後も自分らしい研究を進めていきたい。

● 赤坂文弥(あかさか・ふみや)

2022年度特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」助成対象者。助成題目「Infrastructure Living Labs:リビングラボ実践を支えるインフラストラクチャ構築」



上：2期目の蒲郡ハッカソンキックオフイベント。下：蒲郡みかんの段ボールパッケージ考案のために、ヒアリングを行いました。

約3割と、愛知県内でも高い水準にあります。総代・常会や子ども会といった住民自治組織は存在するものの、参加意識は低迷し、市民によるまちづくり分野でも担い手の高齢化が進んでいます。市内在住の中学生を対象に2019年に実施されたアンケート調査では、「蒲郡市のことが好き」「どちらかといえば好き」と答えた割合が9割に上った一方、将来も住み続けたいとした割合は59%にとどまりました。実際に、進学や就職を機に多くの若者が市外へ転出している現状があります。

あるとき津田さんは、「日本の労働人口の約49%が10〜20年以内にAIやロボットで代替可能になる」というニュースを耳にし、強い衝撃を受けたといいます。子どもたちには、変化の激しい時代に適応し、この土地で、素敵な仲間とワクワクするような仕事をして欲しいと願うようになり、もっと将来の選択肢を広げていく経験が必要なのではと考えるようになります。こうして趣旨に賛同した地域の人たちが集まり、2020年9月に特定非営利活動法人MANARU(マナル)が発足しました。

MANARUは蒲郡ハッカソンチームの運営の中心を担い、地域の企業や市民まちづくりセンター、社会福祉協議会、行政などと連携しながら、IT教育の推進と女性活躍を目標に活動しています。小学生から高校生を対象に、今後の社会で不可欠となるプログラミング技術の普及と向上をはかってきました。



活動地へおじゃまします！ 愛知県蒲郡市を訪ねて
子どもたちがひらく未来の蒲郡

◎林 知香(プログラムオフィサー)

蒲郡市内のスポーツ施設 Gruun(グリーン)にて

【訪問地】
愛知県蒲郡市

【プログラム】
2023年度国内助成プログラム

【助成題目】
デジタル技術を活用した若者主体の地域課題解決型プラットフォーム「蒲郡ハッカソン」



高校生がデザインした、みかんの段ボールパッケージ

2025年11月中旬、2年あまりにわたる助成期間の締めくくりとして、蒲郡ハッカソンチームによる成果報告会開催の知らせを受け、活動地へおじゃましてきました。本プロジェクトは、子どもたちが主体となって地域の課題を取り上げ、プログラミングの力で解決策を模索するだけでなく、地域の人びとがプロジェクトに関わるプロセスそのものを大切にしてきた取り組みです。本訪問はこれまで積み重ねられてきた活動の歩みを現地で確かめ、関係者とともに振り返る機会となりました。

まずは、蒲郡について紹介しましょう。蒲郡市は愛知県東部、渥美半島と知多半島に囲まれた海沿いに位置する人口8万人の都市です。海産物が豊富に水揚げされるだけでなく、温暖な気候を生かして明治期からみかん栽培も行われてきました。景勝地や温泉、複数のレジャー施設を有する観光地でありながら、名古屋まで在来線で1時間弱という距離にあり、住みやすい街としても知られています。会場となった蒲郡商工会議所のホールからは、深く美しい青色の海が窓いっぱい広がっていました。

地域全体が元気になることを目指す

このように環境に恵まれた一面をもつ蒲郡市ですが、一方では人口減少や少子高齢化が進行しています。プロジェクト代表の津田さんがハッカソンの企画を立ち上げた背景にも、地域のこうした状況がありました。蒲郡市は1985年をピークに人口減少が続き、高齢化率は

MANARUの活動は市内の小学校をめぐってプログラミングを教えることから始まり、現在では夏休みのプログラミングワークショップや、「蒲郡プログラミングコンテスト」の開催など、関心と意欲の高い子どもたちが切磋琢磨できる場も設けています。

一般的なハッカソンは、参加者が一堂に会して数時間から数日間で行われるイベント形式が主流です。しかし、高校生が参加する蒲郡ハッカソンは単発のイベントとは一線を画す半年間にわたるプロジェクトです。単にアイデアを出し合ったり成果を競ったりするのではなく、仲間と協力し、地域の大人たちと対話を重ねながら課題に向き合うことが求められます。課題解決の経験を通して自信を得ることに加え、地域とのつながりを深め、将来の仕事や生き方を思い描くところまでを視野に入れている点が大きな特徴です。

それを支える大人たちメンターにとっても、次世代の地域の担い手を育てる経験は貴重なものです。また、メンター同士が新たなプロジェクトを始めるといった副次的な広がりも生まれています。デジタル技術やコミュニケーション能力の向上を中核に、蒲郡ハッカソンは地域全体が元気になることを目指す「チーム蒲郡」のプロジェクトといえるでしょう。

高校生による成果発表会

今回成果発表を行ったのは、2025年5月から半年間にわたって取り組んできた2期生にあたる高校生10人です。関心分野ごとに3つのグループに分かれて課題解決に取り組んできました。

一つは、「深海魚の認知度向上プロジェクト」です。蒲郡では底引き網漁が盛んで、深海魚が豊富に水揚げされます。しかし、知名度の低さから販売網に乗りにくく、未利用魚として廃棄されることも少なくありません。そこで、漁業関係者へのヒアリングを行い、蒲郡で採れる深海魚の種類や特徴、おいしい食べ方などを調査し、PR用のウェブサイトを制作しました。

もう一つは、「蒲郡みかんのリ・ブランディング」チームです。みかん販売に関わる関係者へのヒアリングを踏まえ、市外の人にも魅力が伝わるよう、贈答用を意識した段ボールパッケージのデザインを2種



高校生チームの成果報告会および蒲郡プログラミングコンテスト表彰式の記念写真。いずれもポーズは蒲郡の「G」です。

類制作しました。

さらに、「ミライ世代育成プロジェクト」チームでは、学校部活動の縮小を背景に、中高生の地域でのスポーツ活動参加の機会を広げることに着目しました。地域にどのような活動の場があるのかを可視化し、子どもたちが情報がアクセスできる仕組みづくりを進め、市内のスポーツ・文化活動を検索できるウェブサイトを構築しました。ウェブサイトで整理された情報は「東三河オープンデータ」にも登録され、誰でも利用できる形で公開されています。あわせて、蒲郡市内のスポーツ施設(GYM(グルーン))の活用方法を紹介するチラシを制作し、地域における活動の場の選択肢を伝えていきます。

1期生(2024年5月~11月)の活動では、プログラミングのコーディングに多くの時間を要していましたが、2期生の取り組み時期にはA1を手軽に活用できる環境が整い、

議論やヒアリングにより多くの時間を割くことが可能になりました。とはいえ、テストや部活動、通学先の違いなどから、全員が集まる調整は容易ではなかったといえます。そうした制約の中でも、インターネット上の情報に頼るだけでなく、地元関係者への丁寧なヒアリングを重ね、現場の課題感を成果物に反映させることができました。

成果報告会当日は蒲郡プログラミングコンテストの表彰式も同時に開催され、本プロジェクトに参加した小中高生23人が各賞を受賞しました。その中でも、特に優れた作品を制作した小学生は「GANDHI」のエリア予選へと進みます。

会場には、蒲郡市長をはじめ、議員、地域企業、中間支援団体、行政、保護者など、多くの大人たちが集い、子どもたちの挑戦を見守っていました。地域の子どもたちを応援するサイクルが形づくられたことも、大きな成果といえるでしょう。式典は格式を保って進行し、緊張した表情の子どもたちを温かいまなざしで見守る大人たちの姿が印象に残りました。

地域の関係性を編み直そう

津田さんによれば、参加する生徒は学校の卒業にあわせて2~3年で入れ替わっていくため、その年ごとに集まる子どもたちの雰囲気や関心の向きは異なるといいます。多感な年頃の子どもたちを支えるには、大人のさりげない関わりが欠かせず、単に毎年同じことを繰り返せばよいわけではない点に運営の難しさがあります。一方でそのことは、同じ枠組みの中であっても、その年ならではの問いや関係性が立ち上がり、新しい出会いや発見が生まれることを意味しています。

今回の成果報告会では、子どもたちが自分たちの言葉で地域の課題や取り組みを語り、それを地域の大人たちが真剣に受け止めている場面に立ち会いました。完成した成果物だけでなく、こうした対話の積み重ねこそが次の担い手を育て、地域との関係性を編み直していく財産になると感じます。蒲郡への深い愛情と、地域の子どもたちを大きくみたいという思いから始まった蒲郡ハッカソン。このプロジェクトが蒲郡らしい実践として、今後も固定化や型にはまることなく展開されていくことを期待しています。

BOOK REVIEW



本書「母語・母国語・継承語をキーワードに、複数の言語・文化環境の中で育つ『移動する子どもたち』の〈ことば〉と教育のあり方における研究成果をまとめた一冊です。

移動する子どもたちの〈ことば〉が揺さぶる、私たちの言語観

◎式部絢子(北海道大学非常勤講師)

2022年度国際助成プログラム「日本と出身国を往來する移民の子どもの社会再統合を見据えた言語教育——母語・公用語の補習教室を地域の『多文化共生の拠点に』(代表者:田中雅子氏)の成果物として発行された書籍について、式部絢子氏に書評をいただきました。



●書名: 移動する子どもたちのことばの教育——多様なアクターによる母語・継承語教育の現在と未来
●編著: 田中雅子・坂本光代
●発行: 明石書店
●価格: 3,850円(税込)

本書は、「母語・母国語・継承語をキーワードに、複数の言語・文化環境の中で育つ『移動する子どもたち』の〈ことば〉と教育のあり方における研究成果をまとめた一冊です。研究者に加え、当事者や教育実践者など多様な立場の人々が関わり、プロジェクト報告、インタビュー、調査、ドキュメンタリー映画と多角的な方法で現状が描かれています。

私は、多文化共生社会の地域づくりを目的とした日本語教育に携わっています。ムスリム系インターナショナルスクールでの日本語クラス運営と、自治体主催の学習支援活動を通して、移動する子どもたちと関わっています。子どもたちの多様性は理解しているつもりでしたが、本書を読み、彼らを「日本語教育が必要な子どもたち」として、日本語という側面から捉えていた部分が多かったことに気づかされました。

本書の中心的テーマは、日本と出身国を往來する移民の子どもたちを取り巻く「母語・母国語・継承語」を再考し、教育のあるべき姿

を考えることにあります。言語活動は単なるコミュニケーション手段ではなく、言語に付随するイデオロギーやアイデンティティ、家族やエスニシティ・コミュニティからの期待などが複雑に絡み合っています。本書は、その重なりをさまざまな立場から示しています。

理論

論的枠組みとして紹介される「トランズリンガルリズム」は、言語を固定的な

体系ではなく、人が持つ資源やレパートリーとして捉える視点です。さらに、場にあるモノやニオイといった要素も意味生成に関わるとする「メトロリンガルリズム」や、そこから生まれた「ちよつと性(chthoness)」という概念は、人々が多様な資源を組み合わせて生きていることを肯定的に示します。自分を「モノリンガル」と感じている私は、移民的背景——混じり合った言語・文化の世界——への参加を歓迎してくれているようで、嬉しくなりました。

一方で、本書は理想論に留まりません。第6章では、ブラジルにルーツを持つ日本生まれ

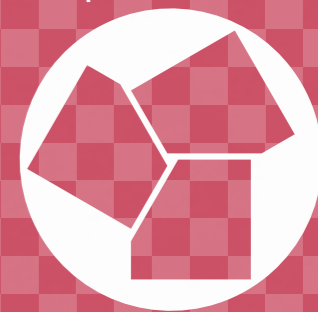
れ日本育ちの方の経験が語られ、10年経っても変わらない課題が示されます。第10章では、社会制度の間隙で、移民の子どもたちの存在が透明化されかねない現実を突きつけられます。マジオリティとして日本社会に生きる自分が、いかに表層的な理解で留まっていたかを痛感しました。

第12章では、neapolisを中心とした若者の言語使用調査が報告され、これまでの移民の特徴との違いや、地域によって母語教育の充実度に差があることがわかります。その他の章では、日本国内外で当事者による母語・継承語の実践が紹介され、最終章では、国際人権規約の視点から、母語・継承語教育の指針が示されます。

移動

移動する子どもたちの〈ことば〉から生まれる意味に、地域社会はどのように関わっていくのか。本書はその問いを投げかけると同時に、〈ことば〉の使用者としての自分自身のあり方を見直すきっかけを与えてくれる一冊です。

*編著者の田中雅子氏による助成プロジェクトの活動内容は14ページでご覧いただけます。



REPORT



国内助成プログラム
成果報告会 & 中間研修・
報告会を開催

2 026年2月13日と14日、ビジョンセンター東京京橋にて、国内助成プログラム成果報告会 & 中間研修・報告会を開催しました。

13日は「日本における自治型社会の一層の推進に寄与するシステムの創出と人材の育成」のカテゴリーで助成を受けた方々の発表がありました。



前半は22年度に助成を受けられた3プロジェクトから成果報告をいただき、続く質疑応答ではプロジェクト拠点や活動地に関わる視点からの質問が多くなされました。また、当時選考に携わってくださった選考委員からコメントもいただきました。

後半は、24年度に助成を受けられた3プロジェクトから中間報告としてこれまでの振り返りと、活動の後半に向けての抱負が披露されました。

最後は、23年度助成対象プロジェクト「ミライクエストー次世代の自治型社会を担う若き冒険者たちを応援するプロジェクト」の主導により、プロジェクトの成果物でもある「デジタルマンガラ」を参加者全員で体験する中間研修を実施しました。1グループ5名ほどで4グループに分かれてのワークとなりましたが、AIを活用した手法で大いに盛り上がった研修になりました。

14 日は、22年度から24年度に「地域における自治を推進するための基盤づく



り」のカテゴリーで助成を受けられた方々に朝早くからお集まりいただき、午前中は中間研修の場として、4チームに分かれて「仮想理事会」を行いました。この研修では、各チームの発表団体に対して参加者が仮想の理事になり、アドバイスや質問を重ねることで、他のプロジェクトの理解を深めたり、自分が実施しているプロジェクトへのフィードバックにもなるようなワークを体験していただきました。各テーブルで温かな視点でのアドバイスや課題の共有がなされ、活発な意見交換の場になりました。

午後からは23年度助成の8プロジェクトと1年間の期間延長を行った22年度助成の1プロジェクト、計9プロジェクトから成果報告をしていただきました。前日に引き続き当時選考委員として携わってくださった方々からのコメントや質疑応答も行い、発表団体のプロジェクトをより深く知る時間となりました。



国内助成プログラム同窓会企画
「今そこにある協同を確かめる。沖縄の自然文化満喫1泊2日ツアー」

本 年度で4回目となる国内助成プログラムの同窓会企画を、2026年3月7日と8日、「今そこにある協同を確かめる。沖縄の自然文化満喫1泊2日ツアー」と題して実施しました。

受け入れを担ってくださったのは、2022年度国内助成プログラム「こ地域における自治を推進するための基盤づくり」の助成対象者、久高友嗣さんのチームです。同チームの助成題目は「キャンプが生む自治基盤組成の検証と実践ーリアルとネット、業界や地域を往き交う共営」で、キャンプという手法を通じて防災領域を起点に、環境・社会・文化等の多分野へ展開できるようなモデル化を図ることにより自治型社会の形成に寄与する仕組みづくりを目指すという活動内容です。

事 前に配布された「たびのしおり」には、持ち物としてマイカップ & カトラリー、レジャーシート、ランタンなどが並びます。キャンプは一時的な共同生活であり、



「道具や経験を活かして、自ら空間や時間を作る事」と定義づけ、同じ空間でそれぞれの個性を重ねながら過ごす事によって生まれる協同や自治を感じてほしいという目的がありました。そのため、今回はキャンプとはいえず TENT を張って屋外で寝起きするというものではなく、ピクニックを通じてその定義を疑似体験する形式でした。

訪 問先は、同チームの皆さんが「私たちがご紹介したい方々を悩みに悩んで厳選しました」という選りすぐりの場所です。OIST(沖縄科学技術大学院大学)のキャンパスを見学し、取り組み内容伺ったあとは、

今帰仁村で沖縄の自然全てを享受し共に生きる暮らしをされている方にお会いし、宿についてからは、沖縄特有の相互扶助の仕組みである共同売店(住民が資金や知恵を出し合い協力して運営するお店)について予習し、夜はナイトツアーで森の生態を学びました。

翌日は嘉陽地区で共同売店の見学をしたのち、琉球大学を訪れ、長年



にわたりアートベースリサーチを実践している先生のお話を伺い、最後はキャンパスの中庭にレジャーシートを敷いてピクニックをしながら全体の振り返りを行いました。

す べての訪問先で得るものが多く、受け止めきれないほどの学びに内省や言語化が追いつかない行程となりました。体は疲れているはずなのに脳が興奮状態にあったのか、移動中の車内で休む参加者は見られず、毎回自主的にランダムで席を替わりながら、なるべく多くの人と会話を交わそうとしていた様子がとても印象的でした。

ウェブサイトには参加者の感想やたくさんの写真を加えた詳細な報告を掲載いたしますので、ぜひご覧ください。

トヨタ財団ウェブサイト
toyotafound.or.jp





本州では温室でしか育たないと言われているヒスイカズラが軒先に咲いていました！[Y.N.]

【編集後記】

EDITOR'S NOTE

● 今年もはや4月。入社、入学等生活に大きな変化が起こる季節となりました。トヨタ財団としても新たな年度を迎え、新しい事業計画のもと引き続き人々のより一層の幸せを目指した助成活動を推進してまいりますので、よろしくお願いたします。

さて、この4月、わが家にも大きな変化がありました。長女は大学を卒業して就職次女は大学2年生になり、いろいろな事情があって、初めて一人暮らしをすることになりました。そんなわけでさまざまな準備に追われていた、とある日曜日に子どもたちの一人暮らし用の電化製品を買いに家電量販店に行きました。

お店の入口で真っ先に目に入ったのが、「一人暮らし用洗濯機と冷蔵庫がセットで4割引の6万円」という広告看板、さらによく見ると「インターネットを新規契約すればさらに6万円引きで0円」という大見出し。知らないメーカーの製品で、信頼性に一抹の不安はあるものの、どうせアパートでネットも必要と思うと魅力的に見えてしまいました。シロモノ家電もここに極まり、という感じでモノの価値が大きく変化していることは頭では理解していましたが、実際に体験してみると結構インパクトがあります。車業界でも「そのうち、ネットサービスを契約すると車がタダでつい

てくる時代が来る」なんてことが言われて久しいですが、そんな時代が本当にすぐそこまで来ているのかもしれない。

ちなみに、我が家はその「ネット契約で0円」にまんまとハマリ、タダで洗濯機と冷蔵庫を手に入れたのでした。果たして、この決断は吉と出るか、凶と出るか……。[N.K.]

● 東京から蒲郡へ向かう際、特段の考えなしに名古屋まで「のぞみ」を利用しましたが、そういえば三河地方出身の知人が「最初から『こだま』に乗るか、『ひかり』で豊橋乗り換えの方が早い」と話していたのを思い出しました。近年はすっかり経路検索サイトに頼りがちで、時間と料金のバランスを考えて経路を選ぶ楽しさを忘れていたかもしれない、と少々反省しています。

在来線で蒲郡のお隣、岡崎市を通過したときには、「ここが石川祐希・石川真佑兄妹を輩出した町か」と、ちょっとした感慨がありました。岡崎といえば、徳川家康を生んだ土地でもあります。家康が江戸を築く際に多くの三河武士を伴ったことから、司馬遼太郎は東京の原型は三河にある、といっ

た趣旨のことを書いています。今度このあたりを訪れる機会があれば、少し足を延ばして三河の歴史にも触れてみたいと思います。[C.H.]

● 本年度の特集テーマは、やはり広報誌名と同じ「JOINT」。50号を超え、原点に立ち返って「つながり」に焦点を当ててみたいと思っています。


初回は年明け早々、雪の舞う鳴子で鼎談を行いました。残念ながら渡辺さんはチリからオンラインでご参加でしたが、鳴子に集まった私たちは「山ふところの宿みやま」に宿泊させていただきまして。こちらのご主人は、以前加賀が執筆していた「お茶っ子通信」の第二回でご紹介していた板垣幸寿さん。実は板垣さん、加賀がトヨタ財団で働き始める直前に財団の助成を受けられており、当時はその偶然に驚かれたとか。佐藤さんと西山さんにとっては、助成対象者の方とのご縁がまた一つつながりました。

紙面だけでなくウェブサイトでも「つながり」をテーマにした新企画を展開する予定です。そこらもお楽しみに！[N.N.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT

本誌送付先の変更等がありましたら、右のQRコードを読み取ってお知らせください。



JOINT [ジョイント] No.51

発行日 2026年4月16日
 発行人 山本晃宏
 編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
 〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
 新宿三井ビル37階
 [TEL] 03-3344-1701
 [FAX] 03-3342-6911
 [URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
 デザイン エディション・ヌース
 印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

On The Journey

—旅の途中で—

鹿児島出張の際、桜島に立ち寄りしました。天気予報では桜島上空の風向きが必ず報じられるとのこと。大い合わせると年間約200回噴火するそう、この日もうっすら噴煙が立ち上っていました。● 写真撮影：新出洋子





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>

